

もう一つの 아프리카

● 田中二郎

(京都大学教授)

30年間足しげくアフリカへ通い続けたとはいえ、私が足を踏み入れた地域は限られている。南・中央・東アフリカのいくつかの国々を旅行したが、延べ70カ月に及ぶアフリカ滞在の大半の時間はボツワナとケニアの調査村で過ごしてきた。

昨年はカラハリ砂漠での調査のあと、ヨハネスバーグから空路エチオピアのアディス・アベバへと飛び、センターの同僚である掛谷誠教授、重田眞義助教授、それに国立歴史民俗博物館の篠原徹助教授と合流した。重田、篠原両君の案内でエチオピア北部へ歴史探訪の旅をおこなったのであるが、じつは、掛谷君も私もエチオピアへ来るのは今回がはじめてであった。

地中海地方、そして後代にはアラビア半島との交流をもつ、この国のおそらく2500年に及ぶ王国の歴史は重厚で、私たちは、広大なアフリカ大陸の中に、いま一つ別のアフリカを見る思いであった。

小型飛行機の窓から見るエチオピア高原の大地は限なく耕されており、山地林を形成していたはずのビャクシンやイヌマキに覆われた原植生はまったく見られなかった。それは、北方で興隆した王国が野山を切り開き、資源を費消しつくしては南へと遷都を繰り返してきた文明の残滓にほかならなかった。

自然の懐にいだかれて、そのなかにひっそりと生を営んできた熱帯アフリカの人々の生活とは異質な、文明の容赦ない自然破壊の爪跡を見る思いであった。

ゆきかう人々の慇懃無礼な物腰。容姿端麗の婦人が執りおこなうコーヒー・セレモニーの洗練された様式と優雅な仕草。日本のどこかの民謡か演歌を思わせる楽の調。文明の栄枯盛衰の歴史のなかで培われた誇りと自負、そして優越感がこの国の文化と人々の行動にはあらわれているのだが、一方でそれらに拮抗するかのように、人々の行動の裏には忍従の思いや劣等感がただよっているようだった。このような屈折した複雑な文化を生み出した背景を、通りすがりの旅行者は理解すべくもないが、帝国が歩んできた長い栄光と苦難の道程に刻みこまれた歴史の重圧をひしと感じさせられたものである。

あの、底抜けに陽気で、あっけらかんと突き抜けるように明るい熱帯アフリカの喧噪の世界とは異なるもう一つのアフリカの姿がそこにあった。